

アダム・スミスのワークから見る中国の儒仙仏思想

尹清洙(長崎県立大学)

キーワード: 道德感情論、国富論、儒仙仏思想、中庸、知行合一

1. はじめに

アダム・スミスは生涯大きく二つの仕事をした。『国富論』の作業で彼は「経済学の父」と呼ばれるようになったが、『国富論』のキーワードは「分業、見えざる手(市場)、経済成長」であると筆者は理解している。

さて、その三つのキーワードを理解するには彼のもう一つの作業である『道德感情論』抜きではその本質が見えにくいと思われる。『道德感情論』のポイントは、「シンパシー、中庸、内観」という三つのキーワードでまとめることができるだろう。

他方、中国では2000年ほど前から儒仙仏思想の対立的批判を重ねながら「中庸」についての理解が深まってきた。

本稿の目的はアダム・スミスの仕事から中国の儒仙仏思想の核心である「中庸」について考察しながら、最終的には「東西不二」という帰無仮説について検定を行いたい。

本稿の構成は以下の通りである。まず第2節において、アダム・スミスの二つのワークについて考察してからその本質は「中庸」であるという結論を導き出す。第3節では中国の儒仙仏思想の変遷について考察した後、明代に来て陽明学の「知行合一」として大集成されたことについて述べる。そして第4節では「知行合一」の本質は「中庸」であることについて述べる。最後の第5節では、本稿の結論をまとめる。

2. アダム・スミスの二つのワーク

ここでは、堂目(2009)に依りながら、アダム・スミスの二つの作業について整理する。堂目はスミスの『道德感情論』と『国富論』において展開された議論を、社会の秩序と繁栄に関する、論理一貫した一つの思想体系として再構築した。

まず『道德感情論』においてスミスは「社会的存在としての人間」は他人から関心を持たれることや同感されることを望む存在として定義し議論を展開した。富や高い地位は見るものに歓喜を与えやすいので、ここに資産形成の野心の起源があり、諸個人の野心によって資本は増大しその結果社会は繁栄すると主張する。しかし、そのような野心や欲望は「胸中の公平な観察者」の正義感によって制御されなければならないと主張した。そして人間のもっともハッピーな状態は「心の平静」にあると結論付けている。すなわち、スミスは人間の本質は「胸中の公平な観察者」であるという認識論に留まらず、そこから『国富論』という実践学を提示したわけである。

3. 中国の儒仙仏思想の変遷

初期の儒教、仏教、仙道はそれぞれ、治世、治心、治身を目指していた。そのため、それぞれ道德修養、精神解脱、身体養生の方法を迫及してきた。具体的に儒教は人倫を大事にしながら塵世に入り世界を経営し、庶民を救済しようとした。仏教は逆に自覚を目指し、般若に傾倒しながら出家の形を取った。それに対して仙道は自然を崇拜し、長生不老の方法を模索した。

宋代における禅宗の普及により儒仙仏三教はお互いに相手の長所を吸収しながら発展し、朱子学を経て陽明学の「知行合一」の段階に至った。すなわち、儒教は「心」と「自然」の勉強を強め、仏教は自覚の小乗から「普渡衆生」の大乗へ、道教は禅宗の思想をかなり取り入れながらそ

れぞれ進化を続けた。共に理を窮め、性を尽くしながら命の真髓について実践を通じて明らかにしようとした。

4. 「知行合一」の意味

この節では、ジョハリの窓という概念を参照しながら「知行合一」の真髓に対する筆者の理解を述べたい。

	自分が知っている自分	自分が知らない自分
他人が知らない自分	① 秘密の窓 (Hidden Ego)	④ 未知の窓 (Unknown Self)
他人が知っている自分	② 開放の窓 (Open Ego)	③ 盲点の窓 (Blind Self)

(出所:ジョハリの窓を参照に筆者が作成)

人間は生まれてまず親や家族関係を通じて社会や自然に対する認識を深めるが、最初は自分の生存本能のために Hidden Ego の状態で暮らす。しかし、幼稚園などの人間社会との共同生活のために徐々に自分を開放し、Open Ego の状態に進む。そして他者との共同生活の中で他者を通じて自分自身に対する理解を深める Blind Self 状態に進化する。このようなプロセスを経て最終的には本当の自分自身の本質に気づくことができるはずだろうが、孔子はそれを「五十知天命」と表現しただろう。

しかし、人間はそれぞれ先天的に与えられた気質や後天的な環境の影響でそのパスはかなり異なる。しかし、現代社会は基本的に儒教のシステムを取り入れた教育体系に沿って基本的な生活様式を営んでいる。優れた先人たちが暮らしの中で悟った智慧は文字で記録されると知識になるが、その知識で武装された先輩たちの既得利権のために使われるとそれは単なる「封建思想」となり、社会の発展を妨げる。権力闘争で負けた人々は仏教で精神解脱を求めたり道教で清淡を唱えたりしながら、中国社会の精神教養はもっと次元が深まり、再び儒教にフィードバックされその発展を促した。しかし、朱子学の時代に来ても基本的に「格物至知」という帰納法的接近(実践から良知へ、①から④へ)であったのに対して、陽明の「至知格物」という演繹的な方法論(良知から実践へ、④から各ブロックへ)は革命的なものであった。「知行合一」とはまさにスミスの主張と同じであることが伺えるだろう。

5. おわりに

西洋のスミスの哲学はプラトンに由来するところが多く、プラトンの『国家』第7巻における「洞窟の比喻」は大変興味深いものである。後期のプラトンは結局、外の太陽(可知界)を見た哲人が再び洞窟(可視界)に戻ることを主張した。本論の分析から分かるようにスミスの『道徳感情論』と『国富論』はまさに2千年前のプラトンの復帰であることが分かる。

東洋の老子における「道(知)」と「徳(行)」、孔子における「修身・齊家」と「治国・平天下」、儒教における「小乗」と「大乘」は結局禅宗を通じて2千年という時期を乗り越えて陽明の「知行合一」に至ったが、それも結局認識論をベースにした実践論であることが分かる。

そもそも「東」と「西」という概念の分離はスミスの国富論における「分業」に値するもので、結局「神の見えざる手(市場)」を通じて再び結合し、新しいひとつの「東西」に統合される。統合される前提条件として「中庸」(理性)が必要であり、それが保証できるのが「内観」(智慧)である。すなわち、「中」がなければ「東」も「西」も存在しない。「東西不二」という帰無仮説は単なるミラージュに過ぎない。「神の見えざる手(中庸)」こそがオアシスであるう。